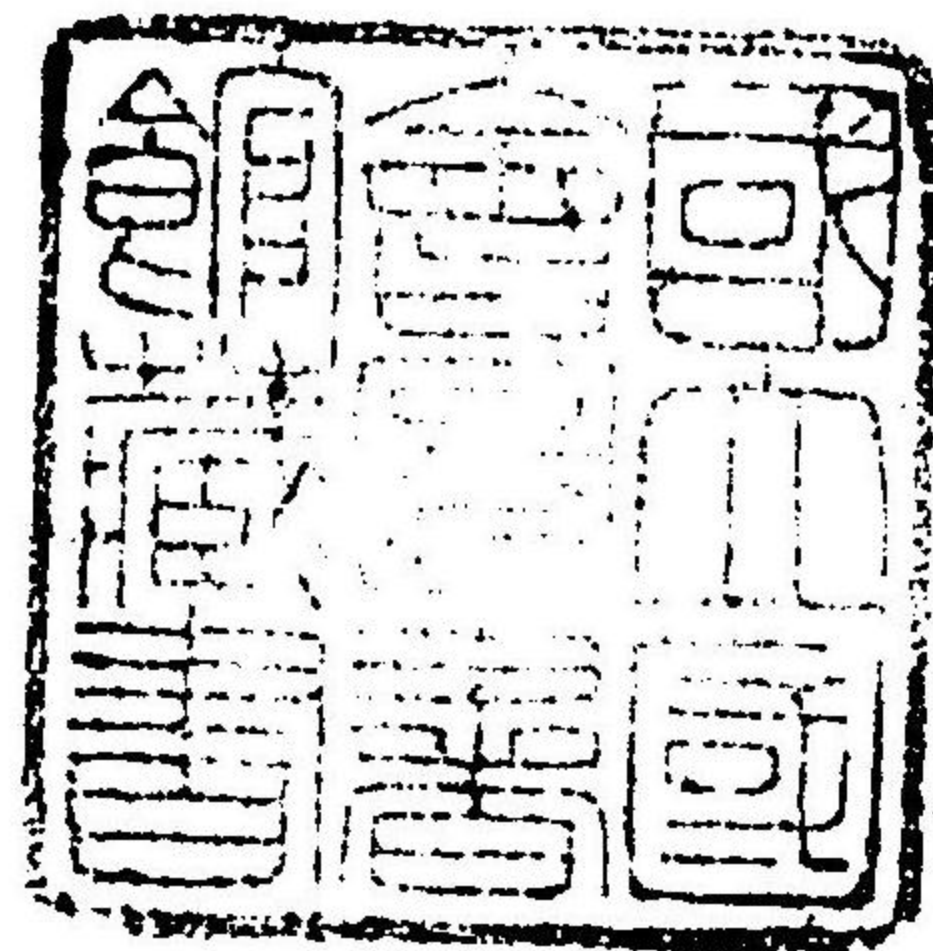


妙
好
人
傳

六
篇

188.72
H532m



338416

妙好人傳六篇

○越後國權律師智現

越後國蒲原郡出雲崎淨立寺〔淨土真宗東派〕の住僧智現幼稚の時より志し人みことあるとよ仁慈の心ふかくしてありうの遊戯はしきことざあればこそをやめ同輩を善道に導くと大人も殆ど感心す成長に順ひ内外典を研究し大に宗義に通曉し常に子弟を教訓し心切に門徒を勸化す人々の徳を慕はざるはあしつひに門主の聽に達し文政二年己卯夏六月擬講の命を蒙り天保二年辛卯二月嗣講職に補せられ長生院に改む身重職にありて人にほこらば卑謙を専らとして常に陰徳を施す途中乞士に逢とあれば囊中を空してこれみ與ふ平生一點の

邪佞よこしまなくよく人のいふとを信まかず他ほかよりこれとこればあたかも頑愚くわんごの人のとし時とき天童てんどう天降あまくだる三さんたび師しよ告つげるとあり皆みなその徴しるしを見る師また途みちよ行ゆとあれハ禽獸きんじゆう馴なれ従したがひさら恐おそるゝとあしこれられ事實じじつ〔海岸かいがん語類ごるい同國どうこく義導ぎだう撰せん委い載ざい今いま略りやく之の〕于時このとき天保てんぽう六年ろくにん乙未いつみ正月しょうげつ十四じゅうし日にち病やまおこくして洛陽らくやう劍先けんせんの北寮ほくしやうよ寂じやくす臨終りんしゆうの時とき西せいよ向むかへ端座たんざ合掌がっしやうして高聲かうせい念ねん佛ぶつす隨從ずいじゆうの人ひとその終しゆうとをしらら命終めいしゆうの後のちもさらら形儀かたちぎみふれれ見みる人ひと隨喜ずいき感歎かんだんせざるハはあし同十六どうじゅうろく日にち七條道場しちじょうだうじやうに送りせりてかりに火葬くわさうし畢まぬ弟子でしその遺骨いこつを拾ひろひて本國ほんこくよ歸かへり四月しがつ十五日じゅうごにちよ更さらに葬儀さうぎを營いむ法ほう譯やくを蒙まかりし道俗だうそく不告ふこくに集會しゆくわいし稻麻竹葦いなまけのとし自坊じぼくの後園ごうゑんに墳墓ふんぼと築きつぐ上うへに虎形こぎやうの石いしを置おく〔此この靈石れいせき久くく同國どうこく粟生あしな津圓つゐん滿寺まんじに別堂べつだうよ秘藏ひざうす此度このたび師德しとくを慕したまへよの靈石れいせきと贈おくらる〕碑銘ひめいハ雲華院うんげえん大舍だいしや〔于時このとき高倉たかくらの講師かうしたり〕撰せんす

嗟あ乎い之こ子こ
 身み擢ね二に嗣し講こう
 人にん天てん隨ずい喜き
 示しめ二に寂じやく洛らく湄み

真ま宗しゆう厥そ規き
 同どう二に事じ塵ちん境きやう
 鬼き畜ちゆう懷わい慈じ
 辱は知ち題だい字じ

學がく道だう二に先せん輩ばい
 開ひらく二に化け講こう帷い
 誕たんだん二に生せい越えつ北ほく
 門もん人にん建たつ碑ひ

○松前文右衛門

奥州おくしゆう松前まつまへの城下じやうげよ山田屋やまだや文右衛門ぶんゑもんといふ仲信なかつたけの人ひとあり能登ののりの國くにの産うよて若わかき時とき松前まつまへへ渡海わたうみし去さる豪家ごうかへ奉公ほうこうしけりこの人性にんせい篤實とくじつにして慈悲じひ深ふかく酒さけをたしまま惡所あくじよへ立たよるとあし深ふかく彌陀やいたの本願ほんがんを信まかし奉ほうま常稱じやうじゆう名念佛なねんぶつして喜よろこびければ主人しゆうじんもまた隨喜ずいきして大切たいせつに召使めいしたる四よ十餘じゆじゆ歳さいの時とき主人しゆうじんと多おほくの金子かねこをもらひ別宅べつたくして商賣しやうばいしけり日ひ々に

家業十年の内にそこばくの金ともうら官〔松前侯御支配〕も願ひて蝦夷地のうちアツケレをいふ場所請負し蝦夷人多く召使て家業を出精しけり常におもふやう蝦夷人の佛法をしらば果因の理と不辨を深くおげき何卒佛法へ結縁し順次の往生不叶とも遠生に結縁じもあつしとものよぶおひ種々よして佛法を理りぞをしへける蝦夷人ハもじより天性の愚よして始のほどハ馬耳風のとくおれども文右衛門深切徹到したりけん後々は念佛申ものもまゝ出来あり或年蝦夷地に疱瘡流行したり昔ハ蝦夷地の習ひ疱瘡を病むもの一人も助るとおしよとてこれ病よりものあまばろの者と愛しおき五里七里の深山にかくおここのもけ死しる頃とこかりて歸り來りて衣服調度まで焼捨てお蝦夷一圓の風義なり是を病むものを叮嚀よ看病し薬をあたへ傳染百人よ餘るも壹人も死たるものおし都ての風義

公聽よ達し辱も白銀十枚御褒美よ預る其時も親屬を集め此事を披露し今度のごほうび是全く佛祖のおさしめ給ふ所かりとて御賞金よ餘金を添て本山〔東瀛〕へ上納したりはた或年アツケレの濱へ大なる龜上りけり堅横十丈計り人みお殺さんやいふ文右衛門制して殺べからば龜を是靈蟲かりやて則ち銘酒〔越後大山二斗入〕八樽鏡と解き是よ吞しめ汝何とてかよる危き所よ來るぞおまひて再び來る事おかれと人に諭らごせくにいひければその翌日早朝いづくおんおよぎ行々その年の秋蝦夷地より歸る渡海の船中殊の外海荒して船數腰覆しね文右衛門に乘たる船をすてに危く見へたるに恙なく難波を凌ぎ同國箱立の湊へ着船おその時不測なるハ海中大浪の中どりく龜の背よ似たるものみへたるよしかば龜を守護にて危きを助めしと後

よ思ひ合せて喜び侍りしときん時よ此人いへるやうハ佛法を信ぜる者ハ國恩も大切よ存ぜべき事あり其ゆへハ四民どのく職分ありやいへども國恩にあらざれば何ぞ安穩よ寢食せん農民ハ耕よ晨にハ霧を拂ひていづ昏よハ星をいもぐきて歸る産業怠る事をしといへども家居所を失ひ公田を貸せして何をもてハ衣食を得んや若しこれを失ふ時ハ父母餓死す兄弟妻子離散せべきも君恩普くおほふて國に害かす聖德里よ溢て家よ災ひかす安穩に衣食を事ハ實に國王大臣領主地頭の恩惠を感戴せべきものなりやいひて常に仰を如實よ守しやかん依て近村これ人れ行ひをかんじて國中この人の行狀をしらざるはかしくて天保元年九月廿日少しの病かくして眠るがとくよ往生と遂たる葬式の日も快晴れうへ白雲變黓をしてさながら聖衆の來現

かとあやしまれ見る人奇瑞のおもひをかしげとやぞ

○奥州津輕佐助

奥州津輕黒石の在波岡村よ佐助といふ百姓あり至つて貧窮よして妻ハはやく世を辭して獨りの娘を露といふを養育しそだてけり頃ハ文化辛未年宗祖親鸞聖人の五百五十回の遠忌に當れりその前年より諸方の末寺みおめて祖恩報謝の法事ありこの佐助のふのみ寺立徳寺やいふハ小地にして門徒も少く法會を營べき手術もかくて住持もその沙汰よ及ばざりたり然るよ或時佐助寺へ参り住持みむかい扱いふやういづれの寺にも祖忌報恩の法事ある何やて住持の沙汰し給はざるや責ければ住持赤面して答ていふやうそれもおなじく片時をうの

事忘るべきや只恨らくも寺貧にして取持べき檀越なき事を寛政の饑
饉以來堂舎もかたのごやく頼廢すといつともつくるべき術なくを
けうへ佛具齋米等卅金の支度なくてはかゝいじこれゆゑよ止事を得
ま勿躰なくもその沙汰よ及ハ老誠よ海山にたどつめあき祖恩を荷ひ
かおらそを警け出來ざること残念かりきてさへくや泣けり佐助も
共に落涙をけるが何とかしして三十兩は冥加金をほしく晝夜心を苦し
むといへども元より貧乏の百姓なれば三兩は手當れ出來あもくいか
ゞいせんとあまり心に納れて後よハ亂心のごとくありと娘露今年
十五歳なれども聊かふれハ辨へも付なればふかくこれを愁ふといへ
ども女の身の何ぞてかく大金と才覺すべきやうなくされども父の有
様氣の毒におもひ近所の心易き者よ話しければ御身のくまで父は志

願と遂させ度おもひ給ハゞこの所より六里計北み青森といふ所に家
家ありて今幸に召仕を索御身の器量にてハ勿論給銀前借も十兩は心
易かるへし古よ親孝行の爲身をうり君傾城とされるもの數としら
せまた耻やするにあらざといふしければこの娘大よ喜ひやく家よ歸
る父よ向ていふやう父上は祖恩を報ぜん爲三十兩乃金を求め給ふと
いへどもかく淺間敷喜しものいひてかうの大金を得んや我身ハや
く母上よびくれ父上は艱苦の中よ人ぞ成何卒一生涯付添參らせ御
介抱申たしとおもひしごとく是非よ不及我身を青森の里み奉仕し三
十兩をかり受志願をいたし給はれたといひ我身は釵のうへの奉公たり
とも少しいひし申不やくとすくむれば佐助も兩手をハふと打汝
よくもいひしものいひてあらざといふしければ佐助も兩手をハふと打汝

338416

親子一所に艱難すへしとおんひしも僅よ一旦の娑婆の愛着に引され
 未來永々劫の御恩にかゝるし今汝の願に任せば我志願も満足する
 道理さらばとて苦界に沈んは親おがら前生の仇あるかと聲もどしま
 せ泣ければお露いろく〜とあぐさめつひよ奉公するに定りぬ早速青
 森壺町何某よ引合せければ殊よ氣に入前借三十兩に取極め證文相濟
 金子受取踊上りて大に喜び家よもかへらせ直様寺へ持行住持へ渡し
 早速支度いたし法會勤へき日限相定めうの日の速夜より念佛勤行嚴
 重みつとめけりさがるにこの事たれいふやかく遠近みきこへければ
 みかく〜感じ入るもあゝ氣代毒におもふもあゝけりこゝに黒石の町よ
 福富何某といふ豪家あり絹木綿を買賣し別家手代あまた人を遣ひ隨
 分に慈悲ある人あり一子彌五郎今年廿一歳みして未だ定れる縁をか

くこゝかしこより入嫁の沙汰すといへども心よ不叶とて相談せど然
 るよ此頃この噂どきよて殊勝のとにねんひを實否を糺さんどて法
 會參詣にかこ付立德寺にてその偽りからざるどきよ家よ歸るや否や
 粹彌五郎と呼寄波岡村佐助が娘代始終をもれおたり實よあるおたき
 孝女也かゝるものを汝が妻せせば我望たりなん汝はいかよおんふや
 尋ねければ彌五郎親孝心れれおまきば何とて父上げよしせおんひ給
 ふぞ我いおみ申さんやや快く領掌しけり父ハ大に喜び急に別家のう
 ち一兩人手代五人差添金子五十兩もたせ早速青森へ行この娘の暇
 を頼み可申やて渡しければ急ぎかの地へいたり委かたり暇を乞よ相
 談整ひ直様駕に乗せ連歸るにこれ立德寺の門前ハ通路おれば通りか
 へり娘も駕の内にてこれは我在所あり父よも對面おたしと思へども

大勢の人と思はん程もいかにありていひも出さざたゞ手を合せ立
徳寺の方をおのみまふりかへりて我屋の方をふしをおみそぐるよ
泪よくれにけりしがるよこれ日ハ法會の満座なれば殊々殊勝な勤行
に聲往還にきこへけり付添ふものも幸ひに參詣せばやとて駕共堂
前へおきいれ御寮にも拜禮し給へとす、受ければうれしくおもひ駕
とり出て、別家手代も前後を圍まれ徐々や步行寄るを御堂參詣の男
女あれハとあきれておがめ居り父佐助も取持の役にて御堂に有け
るがこれ有様を見て且驚き且怪みよくく見れば我娘お露よまぎれ
かければこれといひよと言葉も出さあきれ果ある計りなりこの時娘
お露ハ御本尊よゆるく拜禮を遂げ父の前より具さよこれ事を
話しりり是偏へに信心の顯れ佛祖の冥助からんと彌々喜び念佛し

けり借娘ハ福富方にて早速祝言し夫婦睦む程なく懐妊し玉の如く
の男子を産り父母は申に不及一族に喜び大方から老借又彌五郎の計
ひやして父にも相談し我懸屋敷中へ小屋を奇麗にまつらひ佐助を
引取生涯安樂に念佛勸行し文政の始め大往生を遂たり

○越前玉松女

越前國田那邊浦法光寺の娘生質柔和なる上幼年の頃より後生乃一
大事に心をかけふかく御慈悲を貴とけり住持からびに坊守娘も仰信
代者よて親子三人とも堅固に御法義相續せしがされど小寺よていま
だ御開山様の御影を申さぬゆへ夫婦年來の願心みて貧き中よ住持ハ
分衛とし坊守と娘ハ糸仕業をかして働き數年を経て五十兩金ととし

らへ高祖聖人の御影を申奉らんと娘をつきて三人共よ上京きて明日
 ハ京へ着といふ夜大津の旅籠屋にて右の金子を盗賊よとられ誠に盲
 の杖を失ひたるがどやく途方にくれても泣きり外おし宿屋の亭主
 も心をつくし吟味すれども頭と分らざり住持噫とれくハよく御
 開山様よ御縁のおきものか卅年來こゝろを盡せし夫婦は願も水に泡
 とかりたるかと大聲をあげて泣れたが坊守ハ泪をぬぐひ住持よむか
 ひ今御おげきの中で申しおねたる事おれども私み暇を遣されと云
 ゆへ住持ハ驚き夫ハ何ゆへと申されければ坊守答へて御不審ハ御
 尤おれども私が存じまするハみめおたちよく生れしおれ娘いたハし
 おめら遊里へ賣其金どもて御開山様の御成を願ひましたいと存ます
 ぞ申ていかに御迎申たいとて娘を賣てハ小寺おめらも寺の耻辱おれ

ば女房の去狀よ女の子が付があたりまへおれハおれ子どもらひ賣ま
 せ覺悟といへば住持おるほど尤おるいひ分それハよい心附併おめら
 娘たみ得心すれば何の其義及ばぬこと御影をいたぐ事おれば何
 ぞ寺代稱号よかゝハる事よもあらざり娘よむかひて今きく通りおれ
 ば承知して勤奉公してくれと親お一世の頼ぞといへハ娘ハかくく
 勿躰かい御頼の何れと仰せハ何事ぞ母様代御腹の中から佛祖様の御
 用物よて育上られました私殊更永劫の苦みとのおれて御淨土へつれ
 かへり下さるゝ御開山様代御影の御成とあればいかなる勤めも御禮
 の万部一聊いとひハ致しませぬ早く私を御賣おされよといへハ宿屋
 代亭主物おけにて是とき三人お三人おめらともおめらひし強信
 の人達おめらと誠に感伏して幸ひ島原の松屋はよき親方とて御門徒

のよろこび人おればこれへ御世話申上といへば大によろこび亭主の
世話よて十年乃年季五拾兩にうり年季證文して娘を渡し金子を受と
り御開山様を御請申し夫婦ハ夫より國へ歸りぬ借てこの娘は二月は
かり見習ひさせけるにさずがハ寺の娘よて物事おだやかにありけれ
ば亭主も格別不便をくわへ名を玉松を改め今宵ハもう勤めよ出せど
いふ日暮いたに七十餘の老僧きより給ひ彼玉松みあはせて下されや
の給ふゆへ只今身じまひ最中みて甚いそおしく中へ御逢申事ハ出來
ませぬゆる御ことばを申せといへど是非く逢たいとの給ふゆへ止
事と思ひして彼玉松御目よめければ其方ハしるまいがおれハそちと
ハ切てもきれぬ因縁あるゆへ其方達がとられたる金を吟味して來た
とあれば亭主と呼びて五拾兩金を渡せハ法義喜ぶものおれば大み喜

び早速年季證文を戻し金をうけとり娘を渡しければ彼老僧娘をつれ
て遙々越前へきより老僧ハ御堂へ上り娘は臺所へ入れれば兩親大き
に驚きければ娘右の始末をたれば先御老僧に御目よめこそ御禮
を申上んと親子三人御堂へゆきて尋ねれども老僧見えざるゆへ何へ
御出おされたぞと待ども見えぬ彼是はるうち日暮にかり御灯明を上
げ御香をあげんとするよ御開山様の御前の御机の上に何やら書た物
があるゆへ不審におもひ開きければ娘乃年季證文じやゆへとてハ盜
まれし金の吟味も娘の身請してつれてかへらせ給ふも御開山様でま
しますゆへ三人共み難有泪だに咽び入りしやかん此事つひみ信解院
寂如上人の御聞に達し給ひて御褒美を下されしとて又御領主よ
も御感心れあまり御佛供料を其寺へ給りしやかん

○越後國霜女

越後國蒲原郡黒澤村にお霜といへる寡婦ありもと、相應の百姓あり
 けれども早く両親を先立て一人の夫さへ承々の煩ひに高料代薬を與
 へ心を盡して看病しけれどもそのしるしなく死去して後いたれみま
 き身やかりうれさへあるよ家はさらなり田畠も人手よこたり世ごと
 たるべきたつきなれば人よ雇われ杯してその日くらしの佗しさい
 わん方をし忘れども若き時より深く佛法を信じ因果の道理を辨へ
 ぬればさらはこの貧苦をいじとせすこしのいぢまれば法座を尋ね
 て参詣しかり初よもたこれたるとおと法義のよにあらざれば人どか
 れく敷ものいふとあしがくてまし月をばくもほどよむよく貧苦
 よせまどうさどのものおるよとしもくきて明る元旦といふ大晦日夜

同行四五人いひ合て白米三斗を集め疎屋へ持行ていふやうこのやし
 月の一人住といひ計が佗しからん歳暮の祝義にこの米をまゐらす
 かもこれにて快よくとしとこされや渡しなればお霜大に驚きこことけ
 しからぬことをかまさんゆゑかくして莫大の施こしを受べき謂れお
 しもじへ食なくして死するをも受おたしや固く辭してうけぞ同行再
 三にこれをすゝめお米を贈る々々平生の所行この一事よてんしる
 べし或同行この女よかじり問とありこれ世ハ假の宿かり一睡の夢か
 る未來永世樂み究りなき安樂淨土へいときまゐる度思ふらんこの世
 け貧苦を忍につきてん未來の大福長者とあらんと願しからせやんか
 いあるぞとあじまければお霜答へていふ仲のごとくよてを候へども
 ハやく死よたしとゆめく思はせぬ一日も娑婆にあらへ度ぞ

んぞるれと同行また問ふそといひにといふおしかりの浮世よ執着
せらるゝいふんれたれしみがあるやお霜又答へていふ此世もどよ
と四苦八苦の娑婆なればたゞへ有徳人たるやも苦しみおしやハハ
ふべららどまして貧苦よせまる身れおんのたのしみがあるべき大經
や申御經の中よ此界にて一日一夜善根を修すれば淨土よおめて修
年代間修するよりも勝れまゝ十日十夜これを修すれば千年の間修
せらるゝ勝れまゝけ給はりて候さればこそ此寸善尺魔の娑婆にあま
て一日も長く稱名念佛し廣大の佛恩を報ぜんためさらよ死をいそぐ
心おしと答へければ詰問したる同行大に愧てたちまち懺悔の心起し
るとともにいふまゝなるやどおくて天保のまゝ(國)時日一日懇意の同行
へ廻りて明日必らぞ往生の素懷を遂ん年來の懇切を謝し永訣とつ

げ淨土の再會を約し人さらよ不信翌朝遅く迄戸を開かざるを怪み内
に入つてみれば日頃たしかみ置かん一枚の淨衣を着し佛壇の前み端
座して息絶るゝ奇特のとおりし

○備後國つね女

備後の國品治郡万能倉村醫師寛齋といふ者の妻つね女容貌みよくけ
れども心もまやさしく貞節を守り能く家事を治さめ近隣の人々も向
ふても老を尊と幼を愛して卑謙を専らやしつかりうめに人となら
そふとあまもふかく佛法を信じ晝夜不斷稱名念佛の聲たゆるとか
しきかゝるその聲うらはしく面よ歡喜の色顯ればから高聲念佛する
とあればいかなる不信の人たりやも隨喜感歎せざることおし時の人あ

名して佛御前といふ或僧尋ねていふをぬしの稱名念々にいさみあり聞人隨喜せざるをかしいかなる心得にて稱名せらるゝやおつねいわくわが念々の稱名すべて人にきこへんとぞねがふよあらは常に法音をきくおもひに住し十方諸佛の百重千重圍繞して喜びまゐり給ふやうけ給はりて候へば諸佛圍繞の御前よて申す念佛おこと心得候より外おしを答けるよし宗祖の一人居て念佛せば二人と思ふべし一の一人わ親鸞かりやの給ふともおもひ合されて殊勝を覺へぬ時に同國福山笠岡町島屋惣平とゆかりのふれにて所用ありて六月の炎暑を凌ぎしこよ行けるみ途中より病付てのち立とあたははる醫療手を盡せどもとるしかくたのみかく見へける中にも稱名念佛懈るとかし人病を訪ふものあれば苦痛を忍て法義を談じ稱名念佛の聲平生よがわる

とおしめて廿八日の曉天よ婆娑の對面を今日限るべし未來をみから安樂世界に百寶の臺よて待申べしさりやて夫寬齋み生前のみみへざると殘多し我をき後らみから稱名念佛おこりるまふべからざらばおきとめればおもははる頃て淨土よて對面すべしとくれく申つたへたまを遺言して後の口に別事をいこぞ稱名念佛するところから苦痛おきおとし正午と覺しきころ稱名念佛數十遍稱へて合掌して息絶ぬ年齡五十一歳天保十三年壬寅六月廿八日午の正中かり命終の後をまて見よくき容貌忽ち變つて美麗とみ面を笑を含み眠がごとく見へければ諸人奇異のおもひをまゐりかくて遺骸を万能倉村よ送りて葬儀を營む日頃おれ親しみし同行結縁せんとて葬送の人擧て數ふべからは天華瑞香の奇特おしといへどもこをまた不

思議に往生人あり

○三河國梅吉

參州碧海郡矢矧の宿に館屋何某の一子梅吉の母はいたゞて仲信の
 のかまをいそがしき家業の中にもすこゝの間をえてこれ子を懐よし法
 座へ參詣すると常とされむかひりなきを習もつて性をあるのこゝを
 り成長みしあひ行儀もしくひりそめにも佛檀をまざれを膳
 よ向ハぞつねに稱名念佛を口實とす五歳のはるに近邊の寺子屋また
 れみて手習よみものかをとしへたるに群兒にことかると朝とく起出て
 佛前に向ひ叮嚀は禮拜し直さま師家に行て朝飯の頃歸り來り食事を
 されを父母の催足とまた老師家に行むとふと風雨は日やいづとん

くどおしたましくやすみの日あれば願望をあつめおのれ枕に上への
 りこれいま説法をべし各やつしんできたとて年頃聞覚えたる地獄
 の苦相かとものおたりたる事辨舌ものもげよりこれをきけば小兒の
 わざやとおもいざりけるとかんと時よ嘉永三年(生年十一歳)正月の末よ
 り痲勞といふ病よひり日を追ておもりければ父母大にこれをか
 しみ醫藥をまよふ品をゆめといつともたしおし病者もつひに
 たゞざることを察し稱名念佛愈るとかた親屬れんの病床よ見舞よ來る
 ものあれば起上る苦しみを忍びて御法義の物語をして喜びける婆を
 見聞するひまなく皆隨喜せしとらん同年二月十一日の朝父母を枕近
 くまねき雙眼よかみださうかべ我臨終近きよあり父母よこかれまゐ
 らせ候事中や名残をしこことを候へざりおがらこれハこれ婆のから

ひかれはいかんども力をしたゞ我をき跡もいよく彌陀に願力を信
じ給ひて稱名念佛を怠まなく喜び給ふべしわれ先だちて極樂にいた
り百寶の蓮臺の半をわけて待まらるべしとすくく父母もいざお
ひて眠るおとく念佛の息たえしとむ

○信濃國僧大法

信州水内郡善光寺乃北荒井村願法寺〔浄土真宗〕の肉弟大法は稟性正直
よして根識他にすぐれ幼稚の時より深く因果の理を明て物に恐るゝ
心おし在處菊山中の事おれば或時農家の馬死たるを寺の南なる草原
よ捨置ぐるほどに狼の夥敷競ひ集り擗裂曳散じて晝夜争ひ噉ふと甚
だすたましくして草州童僕もど敢て行とを得る其頃大法いまだ十歳

よもみもざる身の黄昏乃時分唯獨り群狼に中に交りて見物しけるを
隣村の人これを見つけ幼き者の危きとよ思ひて種々言驚しぬるに
大法謝て云く凡う善惡の應報ハ形に隨ふ影の如きたとへ我家にある
とも業いあるを免へからる今まも猛狼の中に入るといへども其宿
業おくば妄み噉食すべからる皆これ先世に定む事ありとてさらしに以
て恐るゝ氣色もおめとければ其人却て我心得の童子の志幹よ及ぶる
とど耻けるやおん生長み隨ひ修學に志し神代村諦聽をいふ僧につぎ
て勤學怠るとおし志おも名利と心とせせ出離生死の勤め外他事を
しまる家もありていとく父兄よ事まつりまた町噂に門徒を教育し
りそめにもたこれある事なく少しのいせよあれば一室よ閑籠り誦經
念佛の外さらし他言を雜るとおしおのりけれハ父兄ハいふもさらし

門徒同朋も有難き人におもひ行末をいひかゝる大法器と云ふらん
 褒あへて然るに親教諦聽藏經建立の志願ありて享保のすゑ武江に至
 る本白銀町四丁目に寓居を朝にハ分衛し夕にハ同行を勸化を信施功
 積りて藏經過半成就す時元文元年の冬大法十七歳藏經建立助縁と
 して師を尋て武江に行寓居に至る師喜ぶと限りかしかたはらに
 俱舍法相の疏鈔をともみ未だ七月をへぞして俱舍の頌百法を名目悉く
 暗誦せり然とも心中に塵世といひ厭穢欣淨のおもひ日を追てふか
 く意念堅固にしてとらら誦經念佛怠るとかし同二年十八歳霜月
 十七日の夜同町大坂屋藤兵衛といへる人報恩講を警み諦聽師を請し
 法話相續時を移せり大法これ暇を考へ遺文數通を認め師の几上にさ
 し置き留主居專助に處用ありて出て行あひだやがて歸り來べしとて

初夜過る頃出行けり師夜半に歸り大法の見えざるを不審し專助を尋
 ければ志がくのよしと申につきいよくいぶかしく大法は居間を
 尋ねみれどもかばるとなればかへりて我几上をみれば一通の書あ
 り上み諦聽貴師几下大法謹拜と記せり驚き披きみるに遺文四通あり
 其一を師に寄別す其二を老爺其三は老壞其四ハ專助に寄別するを
 諦聽師え寄別の遺文に舊冬參上仕候て晝夜朝暮御指南に預候
 段身にあまり有難事に奉存候然るに我身過去因縁の顯は申さ
 がら其甲斐なく學業増進不仕誠に自行妙宗に暗くして他を益するに
 よしかり承り候且へ厭穢欣淨のおもひ頼りよ萌し候ゆゑ此度人
 界の交りを絶ち遁世仕候今迄の御深志御洪恩奉受候と言語にも
 筆紙よも盡しがたく難有仕合に奉存候云々また老爺への遺文み

拙子熟存に娑婆有爲の習電光朝露のとく誠に出息ハ入息をまただ
無常轉變のありさま誰壹人として免るるさや只今にも命終るるば不
珍三惡の火坑へ隨在して盡る事なく大苦惱をうくべき此身かりしに
宿善深厚をハ申ながら此度彌陀の悲願に逢奉り聖人の御教化により
他力信心決定して彼惡趣を免て順次往生の素懷をば此まよる遂る
と彼一目の龜の浮木に逢ひ又靈瑞華の時よいつるがとく身にあまり
たる大慶それ何事か是に過んや偕は急ぎてん生たきハ極樂世界存命
ても處詮かきは娑婆火宅の有様を存じ究め今宵捨身入水仕候云云
また老壞の遺文に然ハ我身としきりに穢土をいじひ淨土をしたひ候
て已事を得此度捨身往生仕候誠ニ父母の御恩廣大なると須彌より
も高く大海よりとふかし我等如來の御惠みとハ申ながら南淨人身の

生どうけ有難御法を聽聞申奉りし事これまづ父母乃御恩かり父母ま
しまさばいかに佛の本願に逢信心決定いたし候んやそれのみを
らぞ私十八歳のとし月を送り候その間だんくの御苦勞をかけ奉り
し事いくばくぞやこの御恩をばたゞへ娑婆みながらへても九牛が一
毛大海の一滴ほど報じ申すことかたし淨土みてこそ報じ奉るべけ
れ我等と御不便に思召候に付てもいよく佛の御恩ありがたく思召
候て稱名念佛怠り給ふとまかれ云云また專助へ遺文に然ハ野僧儀
學問も增長不仕心外れ至りよ存候もはや憂世にてハ御目にかへり
申間敷候申よハ不及候へども朝夕御聽聞のとく隨分御稱名御懈怠を
きやうよ可被成下候云云かくのとく細やかに認めあり諦聽師始專助
を大に驚き急に知音の同行に觸て急ぎ淺草川兩國橋の邊こなたか

よと尋索めしに其夜を寒風はげしく跡しら波をさければ空しく川岸に躊躇し天明にいたりぬ嗚乎茲年いかにある年ぞや茲日いかにある日ぞや惜哉行年十八歳たもまら苦界を辭す悼哉武江何れの處そこの人を没す日頃教誡を受且暮親知の同行はいふもさらなり遠く傳へ聞し人々も戀慕涕泣せざるハかし上世よハかゝるためしもきししが末世よありがふき往生人か「これ事遺身往生傳に委し今略之」

○松前嘉助

奥州松前箱立の在郷赤川といふ小村ありそこの小百姓嘉助といへる夫歸住の者あ元を少やれ祿も持けれども嘉助代よいたるまで種々の事にて身代みかよるるれハ日々煙も立かねし風情も夫

婦共み人に雇傭ハれ聊の賃錢をぞ露命をつかきとさかるよいかる前生の惡報にや不圖病氣附始のほどハ風は心地とれみおもひしも次第に重り元よ小村れとされば醫者やてもかし越中富山の賣藥を求め服しけれどもさらには験なく漸々病あつく二便も臥かおら便し食事わ一粒もまら次第またのこかく見えたりとさきどもこの妻元より慳貪邪見にしてさらば看病せ湯水だに快く與へる便利の不淨をとりもせせは病の重きと飢の疲れよて天保十二年の三月十五日にこの世を去りけるさてしもあるべきならねば近隣寄集へ片計の葬送しけりかゝる貪婦のとゆゑ追福作善の營やてハかつてかく日とへせして男かどかたらひたのしみ暮したり翌天保十三年三月十五日先夫の一周忌やん思ひ出さる何心なく圍爐裏へ打向ひ糸つむぎ

て居たり同在所に惣左衛門といふ鉄炮の名人あり尤公儀献上に鷹の飼の御用を蒙り鳥獸をにまれ打てさし上げ御用の間暇はあつたのあれハ箱立の市にひきぎて業とするものあり此日も朝どくよ鉄炮を持こゝかしこ打廻りけるに何處ともなく猿壹正かけ來れり打やらばやとおもひねらひすましけれども飛鳥とくかけ廻り後よまこの嘉助が家の棟へあがりぬ惣左衛門のおすまじと追行は此度ハすこし日間ありなればらみひすまして火ぶるとさるこの玉いかゞしたりあんなほどの名人のねらひうれて糸つむぎ居る女の胸板をしるゝかよ打ぬきければあといふて死しけりあはやせて走り寄り介抱すれども詮なし村のもの打寄り今日先夫の小祥忌も病中の有様今日にいたり無縁よいたしたる先夫の恨み惣左衛門が手を取りて打殺した

るべしと口々よ云あえり過ちやハ云ながら人を殺しある事隠しも置れど村役よ役所へ訴出ありければ檢使立て昨年よりの有らましと篤と聞糺しかほどの悪人なればたやへ存生よてあるやも上みよ殺べき奴かり幸ひよ死せりよきよ葬り遣すべし惣左衛門事過ちて人を殺したる事重罪のがらべからど去かおらかやうに悪人なれば解死人に不及一村御拂ひよて事濟たり是より後不法の者も因果應報に理をしり佛門に入るもの少からど中就かば惣左衛門ハ一旦御慈悲を以て助命すといへどもまゐる人を殺しある事いかに酬かからんやと忽ち一念發起におもひをおこし即坐し剃髮して願念と改め村やを参行し志し厚人よ交りて常に稱名念佛せしむぞ

○遠江國松井氏

遠州掛川の藩中より松井何某といふ強勇の武士あり心飽まで剛よして
 鎗劍術に達し火術の妙を得り勤仕の暇より山野に獵し深淵に漁
 す殺生を好みさらに因果の道理を辨えど一月の中に一度或は二度
 傍輩より熟戀しまた病氣を申立て十里并里の遠方に遊び二三日よ
 て歸るもありまた四五日ふるもありそのうちより富士川天龍川の源
 底をきとめうこの淵の沼人乃恐るゝ處といへば好て飛入その源
 底を極むるにさらに怪しやおもふともかし或時不圖おもふやう櫻ヶ
 池を我國の中に入り殊より大蛇の住して人の恐るゝ處ありそれ深底よ
 いたる見ばやと例の通り出立て櫻ヶ池の邊より來り直様裸より平生
 覺ひの一刀を腹巻の下よりくし水底より潛入と七八町計と覺えて足に

さばるものありといや水底にいたりぬと心得て手を延して探り見れ
 ば小魚の口計空むげにかりて一面よりしけるなり怪くおもひ力に任せ
 てふむやいへども幾千萬の小魚集り恰も漆を以て堅めたる如くなれ
 ば用意の一刀をぬきとり我身の這入べきほどくりて見んと力に任
 くりぬきけきば漸々よして體代入ばかりの穴明きけり偕この穴を下
 へ潜りぬれハ下より水なく白砂一面に敷て眇々たる處へ出たりたゞ
 朦朧として日光に似せ四方を見れども一物なしといひ沈勇の武士た
 るとよかよとなく身の毛いさだち恐敷かりなれハ例のくぬきたる
 穴より登るとあづぬれどもまた元のとく小魚尻尾計一面よしてい
 づれともとまたぞ例の一刀を抜き前のとくきりぬかんとすれども
 軀をくみて両臂に力なくかえたるとくかきければせんをばかく後悔

すこの時何處どこでもなく老僧ろうそう壹人いちにん顯れ出てやよ汝なんぢは己おのれが藝術げいぎゆつよほこりいらざる思立おもひたたまにて天地てんちの間怪あひだめやしきともしせ凡夫ぼんぷは小智せうちをもて幽冥うみやうのとと疑うたがふのみからぞ君きみを偽いつわり病やまひと稱なづし遠とほく遊あそんで殺生せつじやうとものしむその罪つみをんぞ他たに報くわはんやこの處ところよりひへましましければも汝家なんざいよ傳つぶる彌陀みだの尊像そんざうを拜はいするの小善せうぜん有ありより再またびもやへかへまかり向後けうご心を改あらため佛縁ぶつえんを求めよとておの老僧ろうそう手てを以もつてそのれが躰からだをおしあぐるとと覺おぼえ元もとの水みづ中なかつに出いたり恐おそしとひはん方かたなく漸しだ々しだおよぎあがり茫然ぼんぼうとして居ゐけるを所ところの者ものに助たすけられ藥くすりをも與あたへければ本性ほんしやうにありぬそれよりしきりよ後悔かうかいの念ねんを生おこす君きみ候まちよ病身びやうみんの願ねがひをいたし即刻きやく剃髮ていぱつして念佛ねんぶつ勤行ごんぎやう怠たなく目出度めでたき道心だうしん者ものとて天保てんぽう十四年じゅうしよねんの冬ふゆ十一月じゅういちがつ一日いちにちよ往生わうじやうと遂つひあり發心はつしんの年としと三十一歳さんじゆさいかり法名ほうみょうと道念だうねんといひしとをん

○武藏國三右衛門

江戸えど宇田川町うたがわまちよ木津屋きつや三右衛門さんえもんといへるもれありろの妻さい長病ながびやうにて久ひさ々ひさ相惱あいにやみたる己おのれに最後さいごよ臨のぞみて五歳ごさいよありける娘むめを枕まくらのもじよ呼寄よびよせ髪かみ搔か撫なて涙なみだを流ながし夫おつとに向むかひていひけるを我死われしせん事こと霜葉しもぢの風かぜを待まちよ似にあり是これまた定さだめる報命ほうめいおれば是非せひおしたゞこの娘むめいまだ東西とうざいとも辨わへざる身みの又またいゝるまゝしき母ははに添そて行末ゆきすえ長ながく歎なげかんところ返かへすくも冥途めいどうまで障さやとどいおれり相あひまへて我最後われさいごれ言葉ことばを忘われ給たまへいでもどいひおる方かたよりおよほどのよきためあらん後妻ごさいを迎むかひ給たまふとそれよみおゑてこの子こを忘われ給たまふべからん我われにいはりて不便ふびんを加くへられよとて十五じゆごよもかりおば早はやくいづ方かたへも嫁かして繼母けいぼれ傍かたはらよ置き給たまふべからん心こころよおしるゝもこの事ことはありおとや口説くちが立たて

一とめく泣ぬ夫もどもく涙みむせひひけるをその方ばかり
 子にもあらざ氣遣すべから能よ、いからひ申べし彼が爲かれ
 必だ後妻ハ迎ふべからど今よいありて浮世の妄執と思ハざしてあ
 未來ころ一大事なれや勸めなれハ世よ嬉しげにて手を合せ喜ひける
 が次第呼吸せしく竟にうけ明日十一月三日に命終りぬ圓成寺とい
 ふ寺よ葬り野外の煙どかして、法名を智貞信女を呼て空敷墳に主と
 ハかれり實や水の流よりも速成光陰矢れとく百日をすぎ一周忌もハ
 やどいりぬれば近隣的朋友ゆかりの者よとも後妻おくて身の上の爲
 といがごまりまた幼児の介抱を誰かは爲へきかとす、免けれども
 亡妻の最後よ契約せし事も心よか、いければ辭退れども強ておす
 一めにまた思へハ我も一人よてたとへいか体の用事ありて出行時ハ

幼児の事もいごど心およりなれば終には諫み従ひ後妻と呼たり數
 年をふるうち後妻の腹よも一男一女出生しけるより先妻は娘の生
 長するに從て何をかく隔る空の村雲の心をくらまして難面あたりも
 あら磯の波立ぬ日をかかりけるよ娘もまた濱千鳥に堪ぬかみだに亡
 母のいまさばるる憂目ハあらじもれをどのみ心ひやつみ音をき
 て歎きくらしぬ父もどりくハま、しきあたりありけるに心つきぬ
 れど來る者日よ親しき習よて愛着よ溺れしま、それともいはて過
 しけるよ先妻は娘を己に十七歳にかりぬ今年ハ亡妻智貞信女の十三
 回忌かるとそれさへ忘て追善をも營だ紛れ暮しけるよ十一月十九日
 三右衛門外よ歸りて何となく草臥ぬやて持佛壇の前に寐たるが暫
 ありておはどはね起き大よいかりの面色よて後妻に硬と乞なれば何

心なく定めて急がる用と思出し書給ふからめじて料紙硯を與へける
 に筆をやりて何やらむ一尋計もめきてまた打倒て寐たり其折節久敷
 勤めたる手代の見廻り來りたるが何事あるか斯長々と寐起し書とて
 らせしぞと手にやりてみれば女の手跡よして而も先妻に手跡に少も
 たがふ事なしその文言一々恨の品々をかけり第一最後の約束を變じ
 て間もなく後妻を迎ゆるのみならず十五歳よからば早く他へ縁附給へ
 めたのみ置けるを十七まで女の身の繼母よ添はしめて明喜強面うき
 免と見せ給ふ事第二は後妻のつれなくあたりぬるを知りつゝいさめ
 いましめ給ふともなく愛に溺れ欲に迷ふて只今腹乃子とのみ不便よ
 せらるゝ事第三は今年今月過る十三日ハ我十三回忌あるともおもひ
 出し給とぞ一花一炷の追善もかき路頭へ行倒れゆる無縁のごとく

にかし給ふと甚た恨まれこの恨みかんと散すべきかどその外様々の
 とども書つゞけ置たり此を見て大に驚き情は亡妻に靈魂の著たりを
 見えぬじて後妻を呼て見せれば大に仰天して怪思々るに夫又むく
 と起女の聲して大音あげ眼をいからし後妻よ向ひ我夫理にとむき約
 み違ひ恨の中よも殊さらにはうらめしき我を無縁の者にかしぬると
 ぞやすからぬや俄に狂亂して泣つ笑つ口走けるゆゑ無據土藏へ
 押込修験者かど呼加持祈禱すれどと少し狂氣止ざりたり後妻も身の
 毛いよ立空怖敷靈魂に向ひ様々改悔懺悔志て以來ハ心を改め娘を憐
 め十三回忌と追善すべしとて直ぐに寺へ参り嚴重に勤行をたのみ
 ければ直様衆僧をあつ佛前を莊嚴し法事を勤られし勸經を讀誦
 し終る時分よ土藏よ居る狂亂の亭主いへるハ持佛檀よ燈明とあぐべ

し今我ためよ追善法事ある故に我恨執らハハや止め且改悔して後來
を慎まハ我娘ども憐愍し縁付べし今ハ去べし追善聞經は勝縁よとり
て怨恨の念も止めれば後妻を去るよ不及やて念佛高聲に四五遍申せ
しが忽ち打臥熟睡せると二時ばかりよして正氣みかりぬこの時法事
己よ竟る頃かり家内は者共大に喜び右之趣三右衛門にも逐一に告
知せ夫婦共無二の道心者とされり近き頃のとあり

○出羽國佐吉

羽州秋田仙北郡は横手町といふ驛ありそこに佐吉といふ太膽の者住
たり夫婦の中に四歳にされる男子あり明喜養生を好みこれを諫むる
ものあれば嘲笑ひさらし聞入れはてはハ親類も中たがへして寄

付んれかし日夜惡黨を集め或を酒のみ博奕を催し喧嘩口論のみ明
し暮しけりとに赤き犬を好み人の家乃飼犬よても夜密に恐てこきと
打殺し食しけるとあるよ最愛の男子不圖發熱し疱瘡を發しけり案じ
たるよと軽く日も漸くかせしほにかりけれハ明日と初浴させんとて
其の祝儀よ赤飯を蒸べき用意よ餅米を水よ漬けて置けりその日の暮か
たに赤狗壹疋來りて米の漬たる水を吞んとしける亭主是を見て大よ
怒り山刀を拔持突殺しければわと一聲さけびて死たり快しやてとり
あげみれば犬にあらざして彼疱瘡しける我子かりければ悲しみ悔れ
ども益をかし夫よ因果の道理を怖れ夫婦やも深く佛法よ歸し無二の
道心者とされり子往年本朝新因縁集を見たりしよこれよ似たると
あり實に恐べきハ因果の應報かり慎むべきを平生の作業かりたり

○武藏國與兵衛

武江城西赤坂といふ處に雜賀與兵衛といへる人あり壯年の頃と奢侈
 と好み朝晩の食物にと美味よあらざれば喰とあしたましく麩菜の下
 味あるみ對すれば嫌ひ惡みて椀皿までも抛ちけるが老年に後宿世の
 縁や熟しけん一念菩提心と起し一向專修の念佛晝夜を分たせ勤めら
 れけり或時つらく思はれざるに我厭穢欣淨の行者として娑婆の五
 欲を深くいやひ淨土の五妙とこそ願べき身あるに何故よか獨り美味
 と好み麩惡の食を嫌ひのゝしとあるべきや今より已後惣じて口よ
 かかひたる食物を喰ふべからざる誓ひをたてしそのゝもいかにほど
 よすゝむとこそ曾て厚味の食を喰ふとあし老衰の身おればいとゞ瘦お
 せりひて見えけるゆゑ妻子眷屬うちよりてもましくに美味珍物をす

ゝむれどもすべてこれと食ふとあし強て疎る者あれば我若き時より
 美食に貪着し麩食下味とせらひよみし罪さへあるよ増て今娑婆の
 五欲よこり淨土を願ふべき身おれば努々喰べからざる用とせら
 りよかし享保十年初秋のころ何の病もあききに妻子よ向ふて我ハ八月廿
 五日必ぞ往生すべしとぞ語られたる妻子とはじめまこと思ふもの
 なく戲言あらんと笑ひ合たり爾るよ八月廿四日にいたる少し勞りあ
 りて打臥けるが翌井五日午の上刻よいたり病漸く重く見えければ
 日頃信心したる阿彌陀佛の畫像を枕邊よけ奉り手水嗽あらたまる
 淨衣を着換香を焼て一心に念佛しその妻子を呼て我往生の期已とい
 たり沐浴せ湯とこかすべしとて頻りよこれを急がせけるがはやす
 てに出入の息急よかりて未だ湯の煮ざるうち念佛を共よ往生の本意

を遂られける誠よおもひ入りある厭欣は行者かりき

○山城國とて女

山城國宇治郡山科郷音羽村木屋清右衛門の娘とてハ生質柔和にして幼少の時より父清右衛門に従て法坐へ參詣しふかく佛法の理を明覺常て遊戯にも佛前莊嚴たまぬひとし友達とあつて參詣させ平生聞覺たる地獄地苦相また極樂の体相も物語り念佛をすゝめける父母とも仰信て者ゆゑふかく是を喜び法座とさえいへハ風雨の中ともいとはざこれ子といざかひ參詣しかりいよく信心堅固よして父母も是がめめ引立られ増々喜びのいろとましくりこれ子十七歳の春京都新車屋町いせ屋定七といふ八百屋商賣の家に入嫁してれちも念佛

勤行怠らざよく舅姑につかひいさゝかも争ふ事なくまた町内よても貧しきもの野菜を調ひよ來たとあれば利分を薄して多くこれ賣與ふところ事近隣に評判し商ひ日頃十倍せり故に姑これを喜びまとの子れとて愛ていつくしきければいよく家内睦敷日々に商ひ繁昌し家榮えけりまがるよ嘉永二酉年正月風の心地で打臥けるが數日頭ともあげ老醫療も手を盡せどもとるしかし親里に歸りて養生とまきよし願ひけるゆゑ早速駕を雇ひ音羽村よ送けるに次第に体つかれそのとこの間四月十六日朝俄然として念佛は息絶たりすべて病中苦痛をいとほ老晝夜稱名念佛怠る事なし命終乃ち脚れあり少しあたまりあればまづ佛前よ据置親屬にも告げそれくの用意調けりまがるよ二時計としてうごいふて起あがれば父母をはじめ打寄も

親屬打驚き屏風引明けければ今までどの事變と顔色平生のどくどく
 らよ苦痛の様も見えど満面に笑を含言説とはやめよしてかたづけ
 るも我いよ命終すとおもふほどに目とひらきみれば金銀をもちりばめ
 る高さ數十丈は樓門のごときもれ前にはたりぬ暫くして樓門兩
 方に開くやこへしに琉璃は大地に、百寶の樓臺あり七寶は樹木の間に
 鷓鴣舍利迦陵頻伽はもろくの鳥ありて微妙の法音をさひづり
 無量は菩薩その中よ遊戯しはる八功德は池よ、五色は蓮華咲亂れ無
 邊は聖衆をけうへに遊びたれしみ正面よる金色の山の如くある佛身
 百寶は華臺に端座して說法ましまし無量無邊は菩薩聖衆百重千重圍
 繞して聽聞し給ふあまさま娑婆にありてきこしに百千万倍こえすぐ
 れたる体相さまのあたり拜み奉りありおたさいとんがまかくたどひ

れふして居たりしに壹人の菩薩我前に來り給ひ汝がよくころこの處
 に來るもれ善哉くこの給ふ御聲の殊勝と有難さふよくとへんか
 らかし暫しての給ふハ汝が父母を信心堅固のまればか命終せば必
 だこの處へ生さべしよる汝が姉を不信のものか臨終のまらハ地獄
 へ墮在すべしと語りおがらすてがもき宿縁あればやく佛道に歸し一
 念の信心をおこさば必ま一蓮託生すべしこれ事を告知せよ汝が往
 生今日にありはやく來れとの給ふかとおもへば夢乃覺たるがごとし
 あらきたかやかよる不淨は娑婆に片時も止まがたしとて目を覆ふ父
 母をはじめあり合ふ人々こは事をきよ且つハ喜びかつ驚き異口同
 音よ稱名念佛したりかくるのがたそのうち二時はかり己れ下刻と覺
 し頃俄に目を開きあれとられよ聖衆の迎み來り給ふ今生の對面も

これまでも極樂淨土よて半坐を分て待ち申べし父母をいじめみか
くはやく來り給へや高聲よ念佛三遍唱ひて息絶ぬ父母親屬もか
き中よもいさる奇瑞をよのあたり見聞し目出度往生遂げしを喜ひ
合りぬてあるべきかければ同村光照寺へ葬送し法名を釋尼妙華と
名く諸傳よのする處ぬるためし多しいへともむかし断やれみき
流せしむいほこの一事の誤りなきを糺せば隨喜の餘りゑるして後來
れ人に示す是も子が老婆心あり

○讚岐國小左衛門

讚州高松の在中村といふ所に小左衛門といふものあり田地多く持て
村中よを一二といはるゝ百姓も生得質朴よして慈悲心ふかく路傍

ようゆるものを見てこれに飲食をあたへ或を病て看病するものか
ければこそよ薬をほどとすとその數を知らざりて神佛いあがえざ
れども生得の慈心尤も賞するにたれたる或時城下に處用ありて出々
るにその日ハ折あしく罪人刑に行ふとして役人先を拂ふて來るに逢
ふそのありさまを見て志きりに菩提心を發起し大み悲歎して云くこ
の數人の罪人みか一念の迷倒による惡を造て刑をうく哀むべきの極
まり如何しむかこの輩に佛縁を植ゑめんやとて聲をあげて泣くと
さかおら狂人のととして家に歸ると直様わが菩提寺にもうて見る所
の死罪人の爲に無縁の追福作善をかし永代の誦經料として金子を納
め毎年その見し處の日を忌日として法事勤行おこるとかしこれよ
ましておりに寺へ詣て又法坐よ參詣しつひにも自他の爲に念佛

往生よむとぞふく領解しこれより一向に往生極樂を願求し行住坐臥念佛したといひある忙しき中みも間をぬすんで念佛と共よこれをあせり偏にこれ念佛を主とし世務をあすこと客のごとくせり故に時乃人字して念佛小左衛門と呼べりあるに文政五年冬せし八十よめてたき終るとあせり病中よも稱名暫くともゆるるとかく平生にもこえたる臨終二三日も前より時々看病人の袖をひかへあれぞがみ給へとて合掌するとありそのさま瑞相を感じより見ゆ漸く終焉よ望んで親屬を顧み決定往生唯今あるところよやと合掌して息絶あり入棺よいたると合掌をみだれざありけるやん

○參河國僧廓三

參州菊屋といふ處に廓三といふ僧あり年十九にして東西處々の叢林よ遊學し數年とて積雪聚螢の功已に成り學行當時乃龍象たるといれども壯年以後道心堅固にして深く名利の榮達をいとひ交衆の誼闘とさけて故郷よかへて專光寺〔淨土宗〕の山麓よおめて柴の菴をむすび専ら淨業を修せられけり師平生道業清素にして尤も雜談をきらひ恒に沙門の放逸あるをみてハ慨然として歎息して云く無量劫來生死の身をうくるはるよ今幸ひに佛教よ遇ふ身のもと袈裟の下に身命を失はく何を以てか信施を償んやて晝夜六時專精に勤修せり或とし州の鳳來寺に詣て藥師佛の前みおめて一七日稱号斷食し道心堅固あらんことといのる寺僧その苦修を憐てとばぐ來て慰勞し粥飧を贈る師の厚志を謝すといへども堅誓期を踐て遂に食せど第七日の曉夢

ともなく幻やもろく一僧來て告て云く汝ぢ一生淨雲のごとく栖止を
 さだめされ法の爲よ身命をおしむことおれ若しおらは道心漏が
 とくしてかからせ染界を離れんところにおめて感悟してまた錫を東
 よ曳江府みいより閑室をかりて日々血を刺して淨土に三部經を書寫
 せること數月己よ血枯膚瘦て殆ど倒れどもやまだ竟に終の功
 を全す同學に僧問云く易行は念佛よて事足りぬ何を以て血を刺して
 機功は苦行を修するや恐くハ本願は深誓を展ふみ近しと師答云く往
 生は業よハ念佛よ如くハ我かんぞ不足のおもひをさんや今血
 を刺して經を寫すことを全く自機功をつれるよあらは是れ佛恩は
 深重なるを謝し法の爲身を惜まざしてこそ願生乃退墮せざらんが爲
 此助道かり圓光大師は法のため身命を惜まざることよみ給ふる

よかまぢの色のゆかりの戀またよあふよハ身をんたふみやハする
 且まよ六尺は軀百年乃命全く佛陀の恩致檀越の信施かり我織縫の苦
 勞をしらば耕獲の辛苦を願せ飽までくらひ暖に衣ていたづらよ費し
 妄に用ひて頂よ踵にいたるまで虚受信施の過を償ふ處なし故よ慚
 悔の志ばかまをてさえくと泣く同朋も殆ど袂を濕せり寶永三
 年四月故郷へかへて菴室よ籠り寂をとあふさらにする人なし翌日室
 よ入てみるよ香をたき几によて坐亡せよ顔色笑るがとしや新選
 發心傳に委しくその行狀をあげたてあまりよたふじくかさねてこ
 よしるして有縁の人にしらしむ末世やはいひかおら信心堅固の人は
 かくあらまほしさればとてこれよならひせにはあらねど身を佛陀に
 ゆだね志を淨利にかんんものかゝるたえしを聞ば平常の懈怠を願て

報謝相續に力をばげまし稱名念佛の助縁やせばこれまる一個の妙好人あるべし

○但馬權守橘逸勢の女

昔時仁明天皇の御世にあたりて但馬權守に任ぜられたりし橘逸勢といふは才學世にすぐれたるとそのきこゑ高き人なりけるが咎をかうふりて伊豆代國に左遷せられけりその家を出て配所におもむかんとするどきにのぞみていたく名残を惜むどもおらおほかりしおこけてふかく歎きかかしみし一人のときをさむすめよこそありける父を我身の上ハ止を得ざる時宣おれどもそのわかれのなげおしとていんがたおければいひよもしてつれゆめんとれもひしが官人あつてゆ

るどぐりけるにぞ力をよばて出立けり女はいかに父を思ひしたふこゝろのやみがたきまゝひそめよ我家をしのび出て父のあとを追て驛路よりそのやどりくどちづねつゝ慣ぬ旅知らぬ山川おけうとそこをともいとはぼして晝ハ人目にふれあやしまるゝのおそれあれば此所の森彼所の社おどにしのびてよるくたどまゝくしてしたひ行遂に遠江國よてやうやく父におひつきしが日ごろの姿形よひきかへて髪もみだれて蓬のごとく目くぼみ顔あかつき色くろみかげのごとくにやつれはてたるありさまどうも見る父のこころのうぢらことおやおしはがられて哀れかり逸勢ハすてよ遠江の板築の宿よ着き重きやまひにがよりたるみぞこの女よるもひるもあはらどハおれぼして看護につとめておこもらざこのあやさまを見らるゝの心を賤の男賤

の女みいたるは涙流と、きおあしもどる、いおかりける左れば世に
 ありおたき孝女ありといひひろめけるほどに態と往てやむらふ人も
 おほかりけり父遂よ身まかりければ女のおあしみいためることはい
 んかたかくそのほどに尸骸を假埋よあしみづからみどりの黒髪を
 きりて尼となり妙仲と名づけその墓のほりに草のいほりとむらび
 父代菩提を吊ふのほかあけくれ外に營みかく十年におよぶ永の月日
 もあづかきしたふてくらしける路をゆきかふ人までもこれを見て
 袂ぞしぼらぬいおかりけり嘉祥三年と申すに詔あきて逸勢よ正五位
 の下を贈らせたまひ故郷にへり葬ることせをゆるされければ妙仲尼
 ふかくよろこびて父代裘を負て京都にへりのぼりけり時の人々こ
 そりて孝女ありとうやまひけるやぞ逸勢ハ嵯峨の帝代后檀林皇后の

御せうやまをけるやいふ又今の御靈八所の内は橘太夫といふハこの
 逸勢の事なりとや
 或人いハく妙中官祿をみひくおらざる家にうまれ身ハ軽くしてあ
 たゝおなる衣にまといれ深き閨のうちらやれなはれし身よておほお
 さかきあいだなるよ父代跡をしたひて遠き旅路をたどりゆき父うせ
 くれは墓のややりよいほりびすび尼をなして人に汚されぞ十年の
 久しきあいだもハじめおはり一日れごせく身を全ふ志をたももちつ
 めよ父おひつぎをおひて都よかへれよその辛苦艱難いくばくぞやお
 そらくは男代筋骨たくましきものといへどもあやすく堪忍ぶことあ
 たはじ況や纖柔代女子に於てをやこれによつておもひこれば人代辛
 苦よたへかぬるといふハその誠心れいあらざればかり苟くもろれ

心だよまことならは堪得ぬこぎしていゝかゝるべし然ばすゑはち人の
子やあり人の妻とやらんものいかに辛く苦きことにあふやも昔の世
には斯る艱苦を嘗めこゝろとたる人もありしとれぞと思ひ出せばと
だめて心の憂さをなぐさむるもすげともあるべし

又或人のいばく父母やまひあるやきいふかうれひおとるこゝろ
あま色も形もともにうらしほれ髪もたちもつくるはぞ起居も粧し
らざもれいふことにもおかしげなく絲竹をもしらべ酒食もこのみな
く笑へども口を開かざ人ぞおれども馬らぞ父母の病いあるのち常
の有様にかつるとは古人のとしつゝあり又おやうせたまひてはうむと
しどきは苦よりぬ塊に枕すおやの土にあるぞおかしむるごとてむし
るこものごどきもれぞしきていぬ塊を枕とするハ子おおやのおまきお

らの土中にうづめられもまへることばおかしむれ禮かごどぞ今の世
の人ばそれまでよどよいざともむかし乃人のおやも今の人のおやも
その恩にかゝるおまきに子の孝をつくすこと何ぞむかしよどどきもや
とふかくおそれてはづべき事あらざや夫今をむかしと禮式よかゝと
あり彼と此を國同じがらぬはあらハしもまた殊あるどころありとい
へども畢竟孝ハ深愛を本とすとておやけ身とふかくいととおしとおも
ふこゝろありそもく此こゝろだよ誠あらばその氣もおだやかよそ
の色もよるこばしくしてそれ形もやいらかあるべし斯のごとくよし
て父母につかふまつらば父母はいかばかりかよるこびたのしみたま
ふべき且つ父母よ事ふるにハ愛敬のふたつを關べからん愛とはいつ
くしみおもふことなり敬とはうやまふことなり孝行はたゞこの愛と

敬とのふたつみつくせそそれ愛する心深きとせいたのづから之を
敬ゆるそのとすたせへばひとつの珍しき寶あらんみろれを大事よか
らて秘藏し出し入るよにもつゝしむハ敬ありその父母をうやほふ事
珍しき寶にしめせして可あらんや

○洛東に青士が妻

いつの頃のことによりけん都の東より或青士の祿にはかきて年來あ
ひかれし女とむすめ一人やかすけくしてをめるありそ乃以前にハ何
不足なき生計にてありしかども今はこれとていをむべき業もかく
甲冑より太刀そのほか物までも賣代おしてろの日をおくれども然
るべき官祿よせりあたらせ志て次第におちふれゆくほどよあせゆふ

のほそきなふりもたてかねてとづかに飢をさへふるはゆるこやすら
つきいてけり或時その妻いどうるハ志き朝食をこしらへて夫よす
む夫あやしみて如何にして此米を求めしかとへども妻その故をこ
たへせ妻乃かづきたる帽子のハづれよりみじかき髪のあるハを
見つけてひそかよむすめをよびて問ひければ此ころは母のもちたま
ひし物のこらづ賣つくして一つある鏡までもうそたまひけそまた間
をねらひてハ父公けいかかる方へもありつきたまへおしと神佛よ
のりたまへる今鬢髪を切て人よりろの價よて此米をど一のへられ
しかりやいひもあせせとめくぐと泣きけるにぞおとこ聞てこおしを
よぎりあを口惜きことかむ女の鏡とり髪までもきりてうりつゝ我を
やしむひそのまづしきといためる色だよみせざるいやせしむとせ

る心ある女房どもこれゆゑに永の年月をびしきうき目とみせぬこと
そがしくもまたはづかしけれ我だよなくば又異なる人よ身とまか
せて心やすく世とわあることもあらんものごとくおぼろげなけふは
飯にはあれど箸どもとり得せして涙じよもみ

今は世に在ひもなき身を捨てせめてまきこがむごとくおぼろげな
とまきばこし行方しれどかりよけと妻ハ足どりして慕ひおげきしか
ども詮術かま斯てのち幾ほどもなく女ハ心地例からせとて引こもり
あけるが遂にはおかくかりよけるじぞ

或人はいく今の世の婦女のまるところを見るに家とみ榮つるあ
だは借老のまきりあせむらざるも家道やうやくたせろふるよとよ
ばおまこむせきにおこたれるがゆゑなりとて聊かある事にも怒と

馬り遂にハ棄て去るがごときふるまひを爲すもの多しこれ人の人た
る道としらざるよよれりそれ人の妻たらんものハ一たびその身をお
どこにうやまひせあるおぎりよハあやひこびしきめをみるとも宿世
の業因やこころをて力をつくし心を碎き夫をやしむひ子をばぐみ
うきもつらきも堪しのびうゑこゆるに至るやも必老天とくらみ人
ぞやがむるがごときこやあるべからせこれをこれ人れ妻たるも乃ハ
道とはいふなり

○左衛門尉源渡が妻

むかし攝津に國渡邊黨に左衛門尉源渡といふ人の妻にあじまとい名く
る女あり母ハ衣川といふ衣川の女おればとて人これを袈裟ともよび

ふせりその姿色も心情も優よやとしきこと世に類まれかり渡と一族
よむかへとられてすてよ三年を経たり又衣川の甥よ遠藤武者盛
遠といふ者ありそのころ渡邊の橋をつくりて供養する事のありしに
盛遠ハるの日れ奉行をかりけるが物見あめよまうけおきたる機敷の
中に在りける人をみそめてよりこゝろまどひなればそのありか汝求
めけるみおもハざ己がいとこれ袈裟よてぞありたる年ハ二八の盛
る色香もふかき花の粧ひあるぞ盛遠を未だ二十よみたざるころを
しかば何のときまへそかくたゞひあすらにおもひろとてをしもよた
けき心よも身も消果るばかりなれば良からぬばかりこそを運らして
或日伯母がもやよ往き刀を抜き左をかく伯母が胸にさしあて袈裟
こそこれに思せよといひたるぞ由なきものにつれそいせたるに

よとわれは既よこがれ死かんとせざるにをよひぬたやひ伯母よておは
すともまをしくことが難かりひとり死かんによりはむしろやもようせ果
つべきとらひければ伯母は胸をぐろきて最心ぬらざいおもへども
志んに命のおしかりしかば汝が左までよおもへるども知らず渡にハ
ゆるせしぞわれいかよもよきにはからふ可しと云ひければ盛遠よろ
こひ限まかくはや今宵にじかゝく約束してかへりぬ又手よハかにと
づらひつきたりとしてむすめと呼ばせければやがて來りけるに母その
ありさまを語りて涙にふしづみけり袈裟聞てまばし憫れて居たり
しが心の内にきつとおもひ運らしけるハ事すてにこゝよいあるぬ身
どももらんとすれば母どうしかふのみからざ事おこりておほくのゆ
かある人までも死するに至るべしおむわが身を棄てしひとをむか

しくもるよ、若じをおもひたまし左あらぬ体みてこの事よるしくも
 てか候ら、いんこ、ろやすく思召といふやども無く盛遠は衣紋ひき
 つくろひて入來り袈裟出あひて母の仰おれば兎も角もおんこ、ろ
 よしたおひまゐらせん左れども互みうちとけだして契らんは本意よ
 るあらねば左衛門を討ちたまへがしやありければ盛遠しからは彼
 討つに、如何すべきやいひけるよ、早晩の夜左衛門に髪あらはせて臥
 させどくべしそこより入つてうちたまへやいひか、ハしてさかれける
 既みその夜どかりしかば何どかふ瓷杯とりて渡を酔ふさせ自身ハ髪
 をぬらし、たぶさよどり烏帽子を枕邊にひきよせてかぬていひか、ハ
 せつる間の中、臥し居ける夜更け人しづまりてれも盛遠をれび入て
 ぬれたる髪をすぐりつ、首おきおとじて持ていでやすくしやげたり

打よるこびなるおそのあけおたに首を見ておどろき、あま
 くかおし、たもへどもその甲斐をし、斯てむもさく自害せんより、ハ
 て渡おも、どに往きてそなたの妻をうちたるかあきかり、疾く切たまへ
 どのの首を刀にそへてさし出す渡も、今ハ兎角よとよばせ討ても詮か
 きことなりとおもひければ、盛遠と共に、もや、をさきりて、黒染の衣を
 姿、か、い、よ、けり、後、み、文、覺、上、人、と、い、ひ、け、る、を、す、お、は、も、ら、此、盛、遠、が、こ、と、か
 り、か、の、妻、を、う、づ、こ、た、る、と、こ、ろ、ハ、鳥、羽、の、戀、塚、か、り、と、い、ひ、つ、た、へ、た、り
 又ある人いはく、鮎女宗が詞に、專一あるを、も、ら、て、貞、を、し、こ、く、し、お、お、ふ
 を、以、て、順、じ、を、や、い、へ、り、專、一、ハ、も、つ、は、ら、み、し、て、ふ、た、ご、ろ、お、き、か、り、又
 魯師春恙も、婦人ハ、順、從、を、つ、と、め、貞、慤、を、ま、と、る、や、い、へ、り、人、よ、つ、お、ふ、る
 よ、ハ、順、從、を、つ、や、免、じ、し、己、れ、を、お、こ、む、る、よ、は、貞、慤、と、て、心、た、く、し、ふ、と、て

まことあるべし故に左氏傳に妻ハ柔にして正しといへり柔正とすか
ハも順從よして貞慤あることあり是れ婦人の道は真正と体とし柔順
を用じれば女はものやいらかよてにくげなきをとしやまらば用は上よ
ついでのことあり本體の操は金石の如くいかなる難ものぞとてもしこ
れどうしあふことあるべしされば袈裟乃ごときハよく順よして貞
あるもれとこそいふべけれ

○群馬縣令楫取素彦君の婦人

婦人某氏ハ長州萩松本村の人杉氏の女よて吉田松陰先生の妹あり女
工外ハ文學以兼たる才女よして氣象雄々しく實に婦中の丈夫とも
謂つべし從來杉氏の一族ハ大抵眞宗の流れを汲み御法義に信する者

多き中よこは婦人ハ常々島地赤松金山諸氏に教示を受けられ深信厚歸
の人あり楫取氏に嫁して二男を擧げ長ハ家を繼ぎ次ハ出て久坂氏を
繼がれけるがこの婦人去十一年に十二月頃病痾ヲ罹り最々危篤の折
節を以て二男に嫁かるとおたかおみすの兩女へ左に遺書を認めて指示さ
れたると然るに翌年よ至り病も漸やく快癒し今は正しく家事を督正
せらるゝよし且彼群馬に地ある殘暴を風とし殆んど無教國ともいふ
べき土地あるが近來教會の盛んよ開け御法義の大に行はるゝ分野に
及びたるは全く此婦人の力多きに居るやいふ

遺書

我が眞宗に法義ハ辱かくも全國無二の教法にして我等如き一文
不通の者よも聞ひらき易き他力本願よ候へば能く心を止め聽

聞すれば御慈悲にて候間信心は頂かゝると御示にて自然と心中
よ御入満ち下さるゝ他力不思議の御はたらきみて凡夫の力をば
げまぞ只我身の淺ましくつゝあるく罪障ふかき事を思ひ知るかゝ
る機を助け玉ふ佛は廣大なる願力を疑ひなく信じ罪も障りもみ
る御佛に任せ奉つて往生の大事を安堵するばかりや聽聞申し
候叔此往生の大事を安堵せし上い身とも心とも慎しみます手引
く手に氣を附け國を思ふ心も厚く家を治め夫を敬まふ心も深く
あるやう心懸るが何よりのつとめよて極樂往生の土産こそ凡夫
自力の企及ばざれば自力疑心ははかれ佛智は信順して他力よ
任せ奉つるの外おけれども信後の俗諦門は成る丈心を附て嗜む
免よとの御示しと兼て聽聞申居候然れば此世渡の俗諦門祖師善

知識の掟とあやまらざ男ハ男女ハ女の道を盡し人ハ眞實を以て
交り吝嗇慳貪の心なく儉約質素を本として萬事を一つまやるにし
て徒らの費をばぶき家内を穩み治め儉約と吝嗇とを混雜せぬや
うこびつらひと眞實の謙遜とを見過らぬやう心得べきとかな殊
に女は粧を以て禮儀とするものおれば度にはおれ分よ過ることお
覺へざるものおと去きは身のこしらへ髪飾りも餘り華美に過ぎ
ざるやう去りて夫に對するにあまり見苦しからぬやう心附へし
古への語にも豈や膏沐おからんや誰を主としておらぶららんや
と申すとありとかな女のおちちづくりハ本他人乃爲めよするわけ
からねば左の華美も過るにも及ばざるハ勿論よて垢つかぬ様身
かりを潔よくするが第一と心得べし去れば朝毎よ夫の起出ぬ前に

衣物きかへ帶かどしめかへ身仕舞潔よくして夫の目覺をまつべし
 夫外よ出る時ハ留主の間は夫にかはり何くれとなく氣をくばり不
 都合かきやうばたらくべし凡そ人間一生ハ重荷を擔て遠旅するに
 同きものぞと古人も云ハれ長の旅路れその内ハ天氣長閑に面白
 き氣色を眺める日もあるべし又は雨風雪霰難儀れ旅路もあるもの
 かりたとはいかゝる苦勞あるやも地獄の苦惱よ比おれば左れみ難
 儀じを思はれだたをひ樂みあるやても後に地獄に赴かばその樂は
 苦みの因にて後悔するとも返りがあし去れば暫しの世れ中は心よ
 叶はぬとあるやも頓て極樂往生の樂を思へば苦よから老國の爲
 や法の爲や家の爲め夫れ爲めかど世よ益あるとをさすがこの世滯
 留の仕事と心得夫を樂しみ進みて勤むべきこそまことこれ誠に我國

古今無二れ有りがたき眞宗眞俗二諦の教へかり兼て聽聞申し候
 抑く眞宗の祖師と崇めし御方は何人と問ふに賢くも尊じき雲
 上の御身にて末代の我等を憐れみ思しめし榮耀榮花れ御家を出さ
 せられ彌陀の大悲を知らぬ身に知らせん爲めとて六百年の古しへ
 み雪ようづもれ氷よどぢられ一方からぬ御苦勞にて斯る尊き教と
 弘めろれもち代々の善知識を覓よ水の傳ふがごとく朝夕絶えぬ御
 勸化よて日本國中端々まで行き渡るやう御弘通下され今の大善知
 識まで雲上の祖師より血脉連綿と御つたはるにて類まれかる有が
 たき御宗旨よて候ふにその有がたき程をも辨へだ斯る尊き御教
 の我皇國にありかおら夫をば餘所事よ捨ておきて何の不足ありて
 か此頃世間れ尊よハ異國れあやしき教かどにかびく人もまゝある

よし是ハ畢竟隣の味噌ハ酢味ましやいふ俗諺の如く我が内よある
 米に飯をたべせして隣に焼芋を買喰するよ同じなれば愚かある女
 乃我等が目よさへ最と耻づかしき心は一哉と澄ましき限りなく思
 へ候夫に附ても我等は不思議乃因縁よ斯る有る有る御國よ生
 れ尊き御法を易々聽聞致し時を處も障りなく誰憚から念佛申し
 佛恩の廣大なるを尊やみ我身の仕合を喜こぶ身となりしはこの上
 もかき幸ひと存じ候是れ偏へ佛祖善知識の御恩ハ申すまでもな
 く天朝の御恩親夫の恩恵に返すくも有かたうれしく候らへば
 國代爲め家の爲め親夫に爲めにも格別に御恩報じの眞心を盡せ
 しては叶まじく存じ候若しも佛法禁制眞宗さしとめの國にくもあ
 らば迎も聽聞するよ叶ふまじく又たとひ此御法は弘まり居ると

も夫たる人忌嫌ひて聽聞するを許されどハ五障三従の女の身は思
 ふばかりにて自由ハ出来ど未來の大事ハ知りながら尊とき御法は
 ありぞ知まつ心のまよふ聽聞も出来ど空く惡趣よ歸らんといか
 ばかき悲しきとからん然すれば法義聽聞の心ある身ハ國を思ひ
 家と思ひ夫を思ふ心も格別よ厚ふして萬夫よさからは老夫の機嫌
 を能く慰さめ家の内波風なく内外の者よりもあつがる様心が
 けかば自づから夫の心も和らき御法聽聞を美しく出来終には家内
 残らば御法よ入り此世かぎりの親しみからば未來永劫手に手を引
 て同じ樂を受る身とあると此上もかき幸ひと存じ候わけて女の若
 きときハ身持正しく品行とどくは假初よん人れ嫌疑を受ぬ様心
 を附く慎しむべきとある又子供持候らへば男子女子とも十歳已

下ハ母ハ膝ひざにあはるものなれば母ははの行儀染み付き母ははの氣質かたぎも感かんぜる
こと多おほし殊ことごと更さら心こころをつけて心中こころうちはづかしがらぬやうに致いたすべきと
り夫それに就つても愈いよく第一だいいち御法ごほふを聽聞きこみし身みも心こころも佛ぶつに任せ奉たてまつり言
ふも語かたるもみも御佛ごぼつの御指圖ごしづにしるがひ立つも坐まるも御報謝ごほうしゃの勤
めぞと心得こころえ御稱名ごしょうなもろともに萬よろづの世話せわに立働たてはたくときは佛ぶつの光明くわうみやうに
中に棲すむ身故みか自らやさしくすかほよまる心こころばへとまるも乃なり猶なほ
又前またまへにも申し候やう外國ぐわいこくの教きょうにかびく人ひとに出來候も此御法このごほふの有ありが
たき事ことを知らぬ故ゆゑなればせめてハ早はやく此有このありがもき程ほどを知らせまほ
しく候へば品行ひんかうや狀萬事じやうばんじ美みしく人の感服かんぷくはるやうに身みを慎つとむ候へ
ば自ら御法ごほふの光ひかりも顯あらはれ次第しだいも惑まどを離はなへして法ほふに歸入きよするるとどか
るべし左ひだりあらば佛祖ぶつそへの御報謝ごほうしゃハ勿論もちろん國くにの爲ためめよといふはありか

忠義ちゆうぎをなすべし叔しやくこそ人ひとをも助け我身わがみも心易こころやすく此上このうへの果報德分くわはうとくぶんハ
之これあるまじく候殊ことも御身ごみ達たち二人ふたりながら不思議ふしぎに因縁いんげんよて我等われらと親
子の契あひりを結び候と能よくく深ふかき宿世しゆくせに因縁いんげんと存ぞんじ候へば呉くれぐれも
此因縁このいんげんを徒いたづらとにせぬやう幾迄いつまでも永ながき樂たのしきと一處いっしょに結むすびたく我身わがみ
ハ淺あさからぬ宿縁しゆくげんの顯あらはれよて他力たうりきに信心しんじんを決定けつぎやうし此世このよも心こころいたみか
く氣樂きらくよ一生いっしやうを過とし頭かぶて安養あんやうの往生わうじやうを遂とげ申まひ身みも有ありがたき
と筆ふでよ盡つくし難がたし最早はや此節このせうハ呼吸こききうの息いきも促せまわしければ迫せまり來春らいしゆんまで
かがらへんとハ心こころもとなく存ぞんじ候らへば父上ちちのうへの御恩ごおん万分ばんぶん一ひとも報はくひ
申まさぞ先立きりだち候は勿体むたいかきとと只夫ただちのみ朝夕あさゆふ心こころくるしく候と故此ゆゑ
上うへハ彌やく兩人ふたりども中なかよく睦むつじく申合まはされ父上ちちのうへに孝行かうかう頼たのみ入いり申候
又夫また々夫またを大切たいせつにし貞節ていせつの道御盡みちごつくし下くだされ末々すまゝの事ことまで頼たのみ入いり候

御念佛だに御忘なくば是等々と自ら守られ返すくと御念佛御忘
れなき様偏に頼み入候あめかしこ

尚々父上御召使の女中ハ此身よとりては殊に因縁厚き者ゆゑ別
して深切に物事相談を盡し家の世話致され候やう頼み置申
候

又書添進じ申候信心獲得せば觸光柔順に願益よよりて言葉もや
わらぬよ自ら心なき人も感ぜざるものぞと承はり申候人の上に立
て下の者を使にハ威も恐れて人の隨ふやうにするよりも徳も感
じ有るも思ひて勤めるやうにするが肝要なり猶おみすどのは
久坂家母上よ別して孝道專一のとに存じ申候

○福島縣平民中村佐平次

佐平次氏ハ積年蠶種製造に心を盡し終に内外國人の信用を得てます
其業を精勵し近年に至りては各府縣下の蠶家は豫じめ同氏製造
に原紙を購求せんと約するもの殆んや三百所に至れりと蓋しその地
方ハ養蠶に適したりや雖ども抑もまた同氏積年勉勵刻苦して製法を
の宜きを得て繭絲の美良なる稱して全國第一をす此れ如く國産の名
譽を取り蠶家利を興せしと佐平次氏の功多きに居やいふ云々抑も
同氏の國産よ功勞あると此の如くあるを以て畏こくも前み載たる趣
を高辻侍従より 聖聽に達し奉はつるよ至れり佐平次氏も亦榮譽こ
の上をかきものといふべし左れば同氏ハ梁川村よては第一や呼ばる
豪家にて同所なる本派安養寺の門徒なりそれ祖先は信州小山より

今の伊達郡に移住しその人も御法義を大切にせしものと見ゆ本國より一人の僧を請して共々梁川に來り一字を建立しあるが即ち今の安養寺なりやいふ佐平次の祖母こく女ハ早く寡婦なりしが家政を整への殊々無二の信者なりしが慈愛の心深く出入の者ハ之を見ること慈母に如くし召使のもれも表裏なく働きたるにぞ家道まはしく繁昌し法義に至りて寥々もる伊達郡もこれよき多くの信者を生ぜるに至りしやぞ其積善の餘慶に今に於てハ巨萬の資産を有し中村氏の一族類家みも豪富の名ありていづれも御法義を大切にし説教あれば風雨寒暑の差別なく參詣することとし敢て怠たらざといふ殊に佐平次氏ハ商業繁多の中よも朝夕御内佛のお勤を闕たる事なく御本山より御使僧御用僧を巡回せらるることあれば家内中引連れて參詣し

毎年二度づゝハ商用よて東京よ來られその逗留中ハ必だ幾度となく築地の御別院へ足手を運び今どの御再建の事かどにも別して輦轂の下の御別院ゆへ一日も早く御普請落成あらんことと太法主殿よも深く御心配あらせらるゝと承たまはれば精々御取持申上たしやて盡力せられし甲斐あまて御再建御手傳にやて奥州七州にて第一等納金かりしや聞くところに據れば同氏に厚信ある慈善のこゝろ深きハ感ぜべき事多し今その一二を掲げば氏が壯年乃ころ商ひ用よて出府せし時商人仲間の交際よて吉原よあそび一宿せしが翌朝起床出てまづ盥漱するやいかにや斯る不淨の青樓よては却て勿体おしと思へどと幼年の時とそ一度も闕きたることなき毎朝のお勤をせねば心ずまざ時處ときらはぞ佛恩報謝のめめ六字の寶號を唱へる事なればや

思ひ西の方より向て心しづかよ正信偈六首引を低聲につめめしと又同氏ハ出入の者の酒肴菓子など持ち來りて音物をするものあれば渾てこれを賣拂ふる代價に見積りそれだけの金を積置て御本山へ上納し或ハ御文庫へとして上納するを家法とす此れ如くならば一家妻妾は固より奴僕に至るまで同氏が篤信の風よ化し同氏の孫女ハ祖母のごやく御法義をよること様みとして各をこくといふよしかるが年僅に四歳未だ髪を額を掩ふに至らざる幼女おきども毎朝御内佛へ拜禮するを樂しみせして心よく朝起し若し起さざれば御文章までばたいて仕舞へば大きに機嫌をこねて更に御文章を拜讀しこれに聽聞させぬうちハ朝は食事をせぬといふ又安養寺の嘗て焼失して普請に取り掛りしが今ぞ本堂を塗屋よし表門まで立派に建築し數千圓の入費

かゝるがうに費用過半は中村一族の寄附する所なりやぞ去れば中村佐平次氏の如きハ一家こそつゝ御法義をよること比國産を振興してハ奏上を経るに至る實に今生後生とも目出度人にしてよく二諦相資の御教化を聽聞申こける人といふべし

○佛恩

伏て惟れハ四恩中第一佛恩をまろは中よもとりわけ彌陀は御恩ハ廣大かりそれゆゑハ三世恒沙の御佛にもすてられたるいゝまざらものぞたすらんや五劫に思案をきはえ兆載永劫に苦行をほじ免終よ無上殊勝の願を成就して諸佛よびてられたる惡人女人を一子のごとく撫育し給へり嗚呼時あるか浄機純熟し朝野遠近極樂をぬがひ東

西行かふ人の口ぞさみ小兒のたはふを怖のほぎらむしよも念佛を稱
 ふ世尊一代の經卷いざれか多く弘まる浄土の經疏一天よみては恆沙
 無數の諸尊何れか多く拜ひる彌陀の尊像家ごと戸ごとよ安ん一州さ
 かから彌陀の國たり四輩もつじも彌陀の子たり我等彌陀の恩よよて
 三途どのがれ人身を生じ彌陀の恩よよて耳目とてかへ東西ともしり
 彌陀の恩よよて一衣ともし着し一食ともし得彌陀の恩よよて僅よもあぐ
 さみ彌陀の恩よよて金剛の真心ともし得報恩の念佛ともし申さ稱するも
 彌陀禮するも彌陀念ぶるも彌陀かり彌陀はこが父か母かり君かり
 曇りて月日を見ざる日いあれども彌陀の尊像を拜せざるの日なく鳥
 の聲とささめざる日いあれども念佛の聲とささめざる日なく生きて
 より死するまで明てより暮るまで行住座臥片時も彌陀の恩よよはなれ

ぞみな悉く他力かり佛恩かりたとひ乾坤の外に足と下すの地ありと
 も身を佛恩の外よ安んずるの地あらんや噫廣大の恩徳海實よばかりが
 たし只能常み如來の御名とてかへて大悲弘誓の恩と報さべきもはか
 り

○師恩

そんく祖師善知識の御恩徳の廣大なることやハ御和讃み如來大悲の
 恩徳ハ身を粉にしてを報さべし師主知識の恩徳も骨とくだきてを謝
 すべしやのたまへり故に存覺上人ハひろく善知識の深恩を舉給ふ依
 て吾往生也 大善知識の御徳を稱せば一に大悲同塵の恩二に眞宗相
 承也恩三よ邪正裁斷也恩四に且暮教授也恩五に詳示法度也恩かり實

ハ無量なりといへども今略して五三をいさばかくのごとし先善知識といふ名を辨ぜば人に善を教へて人を化益しよまふ事を善といふ知識とは二字ともよまるといふ文字で徳も形もあらゆる人み知られたる人じややいふことして善知識といふなり是ハ衆生の煩惱の病をとりて應ぜる法薬をあたへて人を化益するといふことと善知識と名くといふ意かりぢれ彌陀如來ハ西岸上より招喚したまふとはいへども釋迦佛ハ開悟にあらざしてはいかて彌陀の名願をきくことを得ん吉水のおがれきよく大谷のたまふがしといへども木像ものいはざきは法門をどくことと名く經典口かければ佛教をのべざこれみえて佛法弘通の師範をもて滅後の如來をあふぐべしや存覺上人はのたまへりそのゆゑは釋迦彌陀ハ慈悲の父母とのたまへどもよましく化導をい

うむることあたはざこゝに當時有縁の善知識われらが無明煩惱の病ひをよくしりて本願の法薬をもて厚く化益をほどこしよまふゆゑみ滅後の如來を仰ぐべしとのたまへば御流を汲身の上ハ自身の善惡の料簡をはかれて只善知識を教勅よたがひ奉れば迷ひを轉じて無上涅槃のさとりにいたるゆゑよ師の教をたもつはすかハ佛敎をたもつかり師の恩を報ざるは即ち佛恩を報ざるなりとのたまへりよかれハ師弟の禮もつども重しがるがゆゑに觀音ハ師孝のために寶冠に彌陀を安置し勢至ハ孝養のためよ父母の骨をいたぐきたまふ菩薩すらかくれごやし況や凡夫においてをや又他宗の人師に異りて吾有縁の大善知識ハ君父師の三徳を備へたまふその故ハ弟子ハいかなる學徳ありとも師坐み登ることあたはざ師は彌陀如來の化身たる祖師乃血

脉相承に限るゝかかれハ君臣ハ儀あることとしるべし世間君父子ハ一
 世の恩かれども其恩おもたざるいはんや永劫得脱せしつと受けし
 恩徳廣大かり故ハ赤尾ハ道宗は近江の水海を一人して汲ほせよや仰
 せられても善知識ハ御意かれば畏りますと申されしとまらざるれば
 誰のひどぐも其御浩恩を謝せんやおもはば常に報恩ハ稱名を喜び
 四供(一ニハ飲食二ニハ衣服三ニハ臥具四ニハ醫藥)五教おもりかく夙夜に感荷し造
 次顛肺に師教を重むべきあり
 名どもよもたらぬ御法を手持りて教受しは雨山の恩

○國恩

夫佛法王法は一双ハ法かり依て上代ぞいひ今時ぞいひ國ぞおもむる

明君賢主はこハ佛法を護持し給ふ故に諸宗の寺院いづれも佛道を行
 ぶる僧徒かたじけなくも天下安穩ハ祈請をいたし奉るこれ全く佛法
 護持の供恩を謝せんおもめかり竊におもんみれば供恩一からん今四
 種をあげて其相を示し一ツみハ治世安穩の恩二ツにハ善惡賞罰ハ恩
 三よハ佛法外護の恩四にハ生涯撫育の恩あり
 昔東照神君建國のはじめ厭穢欣淨の旗幟あげて佛敵朝敵の賊徒ハ降
 伏しおまひしりこのかた三教鼎立して國民ハめぐみたまふ君恩あ
 まねくおほふて國ハ害なく聖徳郷にあぶれて家ハ禍ひなし四海浪靜
 よして古今まれかる大平の御代ハひとへに神君の御高德やあふぐ
 べし殊に維新以來文明の良政にあい奉り外ハ他の束縛はかれ内ハ
 己が自由を得て暖に衣飽まで喰ひ身命ややしむ隨意に出離の經營

をさすこと全く國王大臣の恩惠を感戴すべきものなり故に顯正沙中四十三丁に専修念佛の行者在り所にして一滯のみ一食とくるにゆるりて總じてハ公郷關東の恩化あり別して領主地頭の恩致も公私みつけて更み違背の義をしめてゆるりておかれハ國恩をしからしむるところなり難有感戴し朝廷に命令を重し租税所當をつぶさし兼て仰出さる御法度趣き如實に相守り美敷法義相續せられれば佛法王法に教みおひたる信心の行者にふるまひとひつべきものなり

大君の守りまします恵にてうゑどころゑど暮す嬉しむ

○親ノ恩

うれ孝ハ百行の本にして万善の長なりよて内典外典とも是を第一めて貴きも賤きを生るべきハ孝順をさきとて孝養をばげまはべし死せん後ハ法事供養をばげまはべし心地觀經にハ慈父の恩の高きこと山王のとく悲母の恩にふかきこと大海のごとしと説まはる又同經に佛を供養はると父母を供養はると功德ひとしとのたはへり故に善導大師ハ父母ハ世間の福の極りたるをのたまふもふかきハまづ人と生れてハ父母ハ孝をつくとて恩を報じべし禽獸もハ父母に禮をかし恩を報じとある況や万物の長たる人間においてとやふかければ孝順を尽すべし去るがら限世一端の孝養ハかすといへども未來惡趣よとづめてハ一世の孝ハ水の泡とふるもとひ此世ハ貧窮よて衣食の孝ハ心よまかせざとん未來ハ淨土に蓮臺にて百味の飲食應報の妙服を

受用せしめんものぞと思ひて二世の孝をばげまをへし又蓮如上人ハ
父母の恵をあたにおもふかよ彌陀をむ身ぞそだてたまへばや御
詠じあらせられて多生曠劫迷ふうちに幾万億の身をうけしむと彌
陀たれむ身を育られしハ此もびと親ばかりあるとおもはるはよく
孝道をつくはべきも乃あり

父母の恵いふかし千尋ある海のたどつゝも物のかぎは

妙好人傳六篇終

明治十八年八月廿五日版權免許

明治十九年三月十五日出版

(定價 金壹圓五拾錢)

山口縣平民

著者兼出版人

平 田 思 永

周防國吉敷郡黒川村
第三百八拾三番地居住

山口縣平民

出版人

村 田 太 作

周防國吉敷郡下宇野令村
第貳百三拾四番地寄留

